



国際活動と大学図書館

学長 村上 寅次

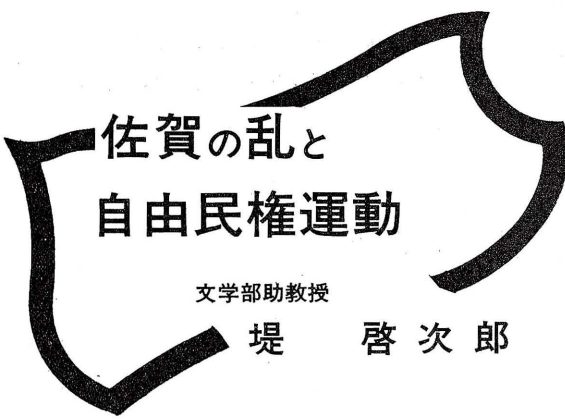
先日、福岡市内で開かれた国連運動全国大会という集会に出席した。これは国際連合についての理解と支持を広めるために、日本国連協会という民間団体が毎年10月24日の国連誕生の日（国連デー）を記念して、各地の支部の回り持ちで開いているものである。私も初めてこういう団体のあることを知ったのであるが、その時もらったパンフレットや講演を通して改めて国連の存在の意義について考えさせられるところがあった。とくにその前身ともいえるべき国際連盟が第一次大戦後に成立してわずか19年で解体したのに比べて、同じ目的をもって1945年、当時51カ国の参加により発足した国際連合が、現在加盟国 159となり、明年は創立40周年を迎え、いろいろな問題をその内外に持ちながらも、世界平和の維持に貢献しつつあることを思うと、私どもは、日本がこれに加盟しその活動に参加していることを喜び、これを支持したいと思う。

それにつけても思うことは、歴史的に見てこのような世界平和維持のための国際的な機構には、いつも人類の視点に立った人びとの知的協力の活動がともなっていたということである。先に述べた国際連盟の時代にはその組織下に「知的協力委員会」とよぶ機関があって、各国の学者、教育家、芸術家がこれに参加したことは、当時連盟事務局次長としてジュネーブにお

いて、この活動のまとめ役を担った新渡戸稲造の著『東西相触れて』のなかに詳しい。そのなかで、とくにフランスの哲学者アンリ・ベルグソンと、ポーランドのキューリー夫人の協力の記述は興味深い。そうして現在の国連の活動においてもこの知的協力は、ユネスコという最も重要な専門機関として復活し継承されているといえてよいであろう。ただし、ユネスコも国連とともに、各国の政治的関係の影響を避け得ないことも事実である。しかしそれらの状況をこえて、人類共通の一つの目標に向かって連帯してゆくことが、人間の知性が私どもに示すところの道である。

このように考えてきたとき、私は、本学図書館が国連事務局から寄託図書館として認められその刊行する多くの図書や資料を送られていることの意義について改めて思い当たったのであった。そうして、私どもの大学の知的活動を、広く国際連帯の目標に結びつけることの重要さを感じる時、この寄託図書館の存在を単に象徴的な意味に終らせてはならない。私どもはこれを西南学院大学の教育研究の理想に立って受けとめ、地域社会、国際社会に具体的に生かしてゆくよう努めねばならないと反省させられたのであった。

卒論特集—私の書いた卒論—



佐賀の乱と 自由民権運動

文学部助教授

堤 啓次郎

私は、2本の卒論を書いている。最初は哲学を専攻した時のもので、ジョン・ロックの認識論について書き、2本目は、その後、学士編入して日本史を専攻した時のものである。この時は、佐賀の乱とその前後の政治状況を素材として、士族反乱と自由民権運動とのかかわりについて書いた。佐賀の乱の領袖となった江藤新平が「民撰議院設立建白書」の署名者であったこと、佐賀の乱の後に、民権結社がつくられ運動が開始されたことなどから考えれば、士族反乱を単純に「封建反動」「反革命」とのみ評価することはできないのではないか、というのが私の素朴な疑問であった。西南戦争が勃発すると、民権家が西郷軍に参加、あるいは呼応を計画した事実、全国的にみられる。今でこそ、士族反乱の評価の再検討が問題とされるようになってきているが、当時はごく一部の意見でしかなかった。

恥ずかしいことながら、私はこの時の論文の内容をよく覚えていない。それは、論文が立論の根拠にしても結論にしても、貧弱なものでしかなかったからであろう。私は器用でも理論卓抜でもなかったから、コツコツと時間をかけて努力するしかなかった。苦しかった、というのが実感であった。私はそのころ京都の郊外の一乗寺に住んでいたが、疲れたり行きづまったりすると、よく夜中の街を歩きまわった。京都の冬の夜は、きびしかった。

私が卒論作成でつくづく思ったのは、自分なりの論理で首尾一貫させて一つの論を組み立てるこ

とが、どれほど努力を要するかということであった。例えその内容がまずいものであったとしても。しかし逆にその努力によって、日本の近代史がそれまで自分が考えてきたものとは異なった新しい顔を、ごくまれにでしかなかったが見せてくれることがあった。僥倖とでも呼ぶしかないようなその時の興奮が、論文作成の作業を支えてくれたのではないかとも思う。

私が論文を提出した翌日、学生部の建物が封鎖された。「大学紛争」が始まったのである。私が論文にとりかかった時期は、すでに学内は騒然としていた。論文を書く条件を確保すること自体が、困難な時期であった。私たちは、卒論試問をうけないまま、卒業となった。

(つつみ けいじろう：日本史学)



貨幣の資本への転化

経済学部講師

柴 田 徳太郎

私が実際に書いたのは大学院の入試論文であったが、これが事実上の卒業論文であったと言えるだろう。たしか、テーマの決定から2カ月間で仕上げたと記憶している。

テーマには、「貨幣の資本への転化」という問題を選んだ。ゼミナールで議論をした際に、既存のどの説明の仕方にも納得できなかったのも、特に興味のある課題であった。テーマが決まれば次は文献収集であるが、これは比較的容易に進行した。基本文献の中に示されている引用・参照文献を探索していけば、自ずと重要な文献は集まってくるからである。あまり重要でないものを沢山読むよりは、重要な文献をじっくり検討することの方が大切であることは言うまでもない。その際、自分なりの問題意識を明確化していくことが必要

—私の書いた卒論—卒論特集

となるが、私の場合いくつかの論争書から多くの刺激を受けたことを思い出す。

当時は、まだカードを作成する習慣など身についていなかったで、問題点などはノートに書き散らしていたように思う。それを基に下書きを作ってみたが、満足するものは出来なかった。そこで、友人や先輩と議論してみたのである。どうい話をしたのかは、はっきり覚えていないが、対話するうちに論文作成プランの変更を思いついたことはよく覚えている。この時に、ようやく自分なりの構想が固まったと言えるだろう。いったん構想が出来上がれば、その後の作業は順調に進むものである。最後の追い込みの時期の緊張した気分を、今でもなつかしく思い出すことができる。

私のささやかな経験から言わせてもらえれば、論文作成の際に重要なのは問題意識と構想の明確化であると思う。そのためには、読んだり書いただけでなく、議論をすることがことのほか大切となる。私自身の場合も、恩師からよりもむしろ友人や先輩達との対等な議論の中から、多くの事を学んできたように思うのである。

(しばた とくたろう：金融論)

ソビエトにおける 総合技術教育の発展に ついて

文学部講師

松 永 裕 二

社会主義諸国における一般教育である総合技術教育—レーニンの定義に従えば、すべての主要な生産部門についての知識を理論と実践のうえでさずけるもの—が、ソビエトにおいてどのように発展していったかを、教育制度・内容の両面から検討したものである。

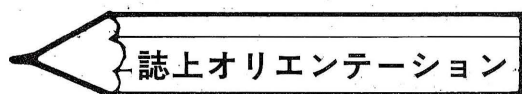
大多数の大学生にとってそうであるように、私にとってもこの卒論が最初の（幸か不幸か、最初で最後にはならなかったが）「学術論文」（？）であった。卒論をパラパラとめくっていると、メ切日に是が非でも間に合わせようと必死になってペンを走らせた当時が、懐かしく髣髴されてくる。

その内容について自己評価をすれば、最初の学術論文とは書いたものの、論文の構成、理論的考察、文章表現等は言うに及ばず、論文作成の基礎作業である必要文献・資料の収集の面からみても、これは、とても本格的な学術論文と呼べる代物ではない。唯一のメリットと言えるのは、自分で言うのも憚られるが、卒論執筆の動機・問題意識がかなりはっきりしている点であろう。卒論の序で、私は、現代の資本主義社会における教育上の諸矛盾を解決するための緒は、社会主義諸国における教育の理論と実践の中にこそ見いだされ得るといった旨のことを書いている。今となって考えれば、この問題意識は多分に青臭いものと言えるが、その背景には、1960年代後半の学生運動・大学紛争があったのは言うまでもない。ともあれ、私の卒論は、問題意識のみが先走りして内容が伴わない論文の典型であった。

とはいえ、この問題意識は、私が大学院進学以降論文を作成するに際して、常に私の脳裡のどこかにひっかかっているように思える。現に、私は依然として、ソビエト教育に関する論文を書き続けているのである。この意味では、稚拙なものとは言え懸命になって書きあげた卒論こそが、正に、私の研究者としての出発点であったと言えよう。

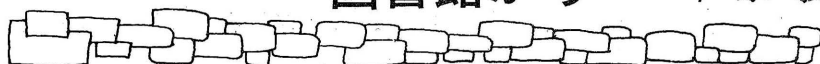
(まつなが ゆうじ：比較教育・教育原理)

10年以上も前に書いた卒論について、何かを書く羽目になった。卒論のテーマは、「ソビエトにおける総合技術教育の発展について」で、400字詰原稿用紙160枚程度のものである。内容的には、



卒論作成の皆さんへ

図書館から 今永義純



諸君はもう卒論の準備は出来上っていますか？
まだ！、テーマも決っていない！図書館としては、
今から準備をする者も含めて、この館報を通じて、
卒論を書く上での参考になればと思って、指導する
立場の教員からお三人に、ご自身の体験談を、
図書館よりは、テーマの設定、文献目録づくりに
役立つ方法、参考文献の探し方などについて記
して、諸君の卒論作成の参考に供したい。

(1)イモヅル式資料の探し方

資料（図書、雑誌論文）を探す方法として、イ
モヅル式と呼ばれる探し方がある。テーマと関係
の深い1冊の本、1つの論文から、その中にある
引用文献と、参考文献から次々と文献を探し出
して行くやり方である。最初の1冊は図書館の分
類目録で見つけることもできるし、『経済学辞典』
など専門辞典の項目の説明のあとについている参
考文献を使う手もある。

この方法は、長期にわたってひとつのテーマを
追って行くときには便利なやり方である。探して
行くうちに、何度も顔を出す文献一すなわち必読
文献を見つけることができるし、研究の方向を定
めることもできる。しかし、短期間のうちに、資
料を集め論文を書かなければならないときには、
必ずしも良い方法とは言えない。それは網羅的に
テーマに関する文献を集めることがむずかしいか
らである。どうしても漏れが生じてくる。

(2)二次資料を使っの資料の探し方

図書館には、“文献を探すための文献”である
二次資料（目録、書誌、索引）がおいてある。こ

れは一次資料（図書、雑誌論文など）を探すため
の資料である。過去に出された図書、雑誌論文は
膨大な数にのぼるが、それらを分類整理（主題別、
著者別、書名・論題別）した二次資料によって、
論文に必要な文献を早く、正確に、網羅的に探す
ことができるのである。これらの二次資料は、各
開架閲覧室に一般図書とは区別して、辞典類と同
じように禁帯出として別置してある。また閉架に
もおいてあるので2階カウンターでお尋ね下さい。

(3)本学図書館に所蔵しているかどうかの調査

二次資料などから探し出した文献の文献目録づ
くりが終わると、今度はそれらの文献が本学図書
館に所蔵しているかどうかを調べる必要がある。図
書については、3階の目録ホールにある目録で探
して下さい。二次資料から探した文献であるので、
書誌の事項（著者、書名など）がはっきりしてい
るので、どの目録を使用してもよい。雑誌論文に
ついては、それらの論文が収載されている雑誌名
がわかるので、その雑誌が所蔵されているかどう
かは、各開架閲覧室に「西南学院大学雑誌目録」
（1983年5月末現在）がおいてあるのでそれで調
べること。

(4)本学図書館に所蔵していない文献の入手方法

また、本学図書館に所蔵されてない資料につい
ては、現物の貸借（図書の場合）、複写（雑誌論
文）によって取り寄せるので申し込んで下さい。送
料（返送費）、複写代は利用者の負担となる。

（いまなが よしずみ：情報サービス課・課長）

ジャパン・マークを利用しての 目録カードの出力

— 目録の将来 — 大羽 康二

今日の高度情報化社会において、各界同様、図書館界においても、電算化の波が押し寄せている。本学図書館においても例外ではない。国立国会図書館製作のジャパン・マークテープ週刊版の購入を昭和56年4月より始め、昭和59年2月より目録カードの出力テストを始めた。

本来、ジャパン・マークの使用においては、リアルタイム処理で自館との調整を行い、蓄積し、ファイルを形成すべきであるが、本学図書館は全学的なコンピュータ使用のため、使用量が制限されているのでまい具合にはいかない。そこで、整理の迅速化と充実をはかるため、本学図書館の情報検索の唯一のツールである目録カードの打ち出しに力を注いだ訳である。

しかし、ジャパン・マーク自体に多少の欠点があり、また、本学図書館との整合性を保つという点で、原形では使用できない。外字、書名カードの記入方式（ローマ字か原綴か）、それに付随するカード配列の問題、ヒット率の低さやタイムラグの問題、また作成作業の時間的問題など多くの問題をかかえている。しかしこの目録カードで十分利用できる部分も多く、それは十分に利用する方針である。そして将来的には、オンラインを目指すものであり、これはその過渡的な経過として使用している状態である。

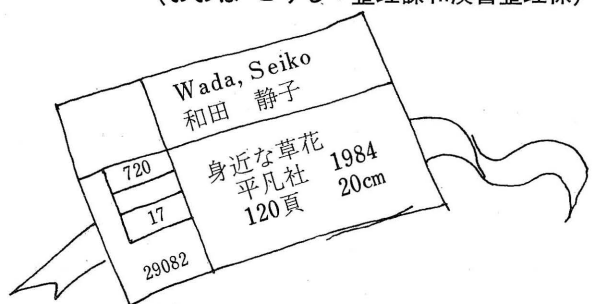
1970年代の図書館業務の機械化は、単館システムで運営されてきたが、これからの図書館はネットワークシステムで運営されるべきである。その構想については、学術情報システムの最終方針とも言うべき「大学図書館の電算化」を文部省学術

国際局情報図書館課（昭和59年3月）が刊行している。これは、全国統一のデータベースの形成、有効利用するなどといった点で、大変大きな存在になることは必須である。

しかし、そのシステムにおいても、その目録形態つまり記述方式については、ISBDに準拠している日本目録規則・新版予備版を使用するにしても、国際的な書誌記述としての問題などが残るのではないだろうか。だから、その大学の実情に応じ、受け入れ体制を組織し、またそのシステムと自館の融合性を保つように努めなければならない。また自館入力で作成するデータ処理はいかに行すべきか。単巻、全巻、人名典拠などの複数のリンクを形成し、あらゆる角度から検索が行えるようにシステム化を行わなければならない。

要するに、受け入れ→整理→目録まで、流動的な形態をとり、順にデータを利用し、最終的には検索用として用いたり、閲覧関係にも利用できるという風に行えれば最高である。そしてこれらの事は遠い事ではなく、もう行っている館もあるし、本学図書館においても近い将来このようになる日が来るであろう。

（おおば こうじ：整理課和漢書整理係）





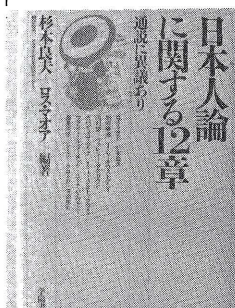
読書の秋—私のすすめる一冊—

『日本人論に関する12章』

—通説に異議あり—

杉本良夫+ロス・マオア編著
(Ross Mouer)

文学部助教授 久屋孝夫



木曜の Daily Yomiuri に 'Between East & West: Cultural Barriers Q&A' という相談コラムがある。日本で暮らす外国人、外国で暮らしてきた日本人の文化ショックをそれぞれの文化の立場から擁護するものだ

が、回答者の解答と日本人の端くれとしてのボクのが、回答者の解答と日本人の端くれとしてのボクの考えがちがうことが多い。

それは民族性・国民性という名で集団がステロタイプ化されているからである。また絵にかいたようなステロタイプ人間は稀だからである。誇張したステロタイプは漫画と同じで目に鮮やかに映る。が、実像とはほど遠い。D・ラミス(「イデオロギーとしての英会話」)に「人種差別的」と言わしめた現象と同根である。

今を時めく比較文化論に欠けるものは、集団の多様性と流動性への認識である。地域性, sub-cultures, 歴史的考察を考慮の外に置くことはできない。吉里吉里人にも匹敵する言語文化に育てられた山陰人が、支配語としての国家語〈日本語〉習得に費やしてきた莫大なエネルギーと時間をふりかえると一枚岩の〈日本人〉論に、或るイデオロギーのにおいを感じないわけにはいかない。

Benedict, 中根, 土居, Ben Dasan等々に心酔したあとはこの書で頭を冷した方がよい。多様化、国際化という掛け声とはうらはらに、ステロタイプが強制され個性的に生きにくくなりつつある1984年型管理社会への警告の書とボクには見える。

(くや たかお: 英語)

149

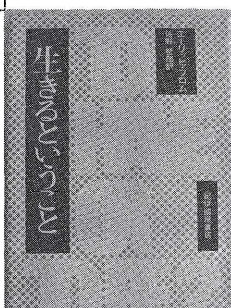
361

204

『生きるということ』

エーリッヒ・フロム著
(Erich Fromm)

法学部教授 河島幸夫



現代人は、「持つこと」(所有)への欲求がきわめて強い生きものである。お金を持つ、テレビを持つ、自動車を持つ、家を持つ、地位・資格・権力を持つ、などなど。人間は何百年もの間、限りなく多くの物、

快適な暮らしを求めて突き進んできた。しかし、こうした持つことを追求する社会は、人間らしさの喪失と自然の破壊をもたらすことになった。

『生きるということ』の著者フロム(1980年没)によれば、人間と地球の将来は、私たちがこれからもこうした持つことへの執着に生き続けるか、それとも人間や自然のあるがままの存在そのもの、つまり「あること」を尊重する生き方を選びとるか、この二者択一にかかっている。

本書は、私が学生諸君と毎月1回開いている読書会で使ったテキストの中の1冊である。その例会の時(1979年11月)、参加者一同が深い感銘を受け、話がはずんだことを思い出す。本書をひもといいた人は、読書という人間のいとなみそれ自体が、けっして単なる知識の獲得(持つこと)ではなく、まさに生き方の転換(あること)を促すものであることを、実感するであろう。

ちなみに本書の原題は、To Have or To Be? (ドイツ語版は Haben oder Sein?) であり、西ドイツではすでに50万部をこえるベストセラーとなった。在学中に読んでおくべき必読書として、ぜひおすすめしたい。

(かわしま さちお: 政治学)

146

110

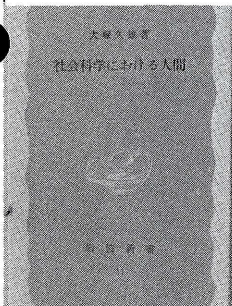
読書の秋—私のすすめる一冊—



『社会科学における人間』

大塚久雄著

経済学部4年 津 守 貴 之



一方における先進国内での様々な疎外現象、物質文明に対する懐疑、他方における南北問題の激化、また社会主義の挫折等、既存の、ユーロセントリックな諸概念を基礎とし出発点とする社会科学の諸理論の枠内では

解決が困難な問題に現代は直面しており社会科学のパラダイムの崩壊が叫ばれ始めて久しい。そうした中で社会科学の諸分野で改めて、その根本的な研究対象である「人間」について再検討を加える、或いは全く新しく把え直すという作業、「人間論」構築の試みが盛んとなっている。本書はそうした広汎な問題意識の存在を背景に西洋経済史の泰斗、大塚久雄氏が著わしたものである。その内容はいわゆる「ヴェーバー＝大塚史学」の人間類型論を中心的概念としてデフォウ、マルクス、ヴェーバーと、しだいに人間類型論の萌芽、充実を述べ、それがその「価値自由」という概念を基盤とした「比較」という方法によって上記の現代社会、或いは社会科学の諸問題を解決する一つの重要な糸口となる可能性があるということの説明となっている。経済学の分野からの「人間」論へのアプローチであるが、文体の平易な入門書形式になっており、適否はともかくその内容は「人間」について根本的に考えることが必要な現在、少なくとも我々、社会科学系学部の学生の一読に値するものであろう。

(つもり たかゆき：経済学科)

092

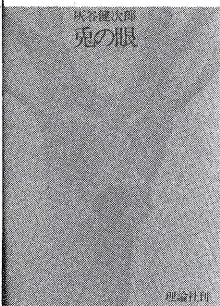
301

4

『兎の眼』

灰谷健次郎著

文学部3年 立 山 とよか



私は人に、これは絶対にいいですよと言うほど強くすすめることのできる本はありませんが、学科の関係上、或いは自分の趣味で、教育に関する本や、児童書などをよく読みます。その中で最も心に残った、灰谷

健次郎さんの『兎の眼』を、私のすすめる一冊としたいと思います。

この本は、百万読者を感動させた本と言われるほど、教育を志す人のみならず、多くの人に読まれた本ですので、私が今さら紹介することもないと思いますが、ある工業地帯の中の小学校を舞台に、教師と生徒との交流、学校と地域との関わりを、灰谷さんの持つ人間味溢れる文章によって、書かれたものです。その中には、人間の真の在り方、教育の本質、社会風刺、社会批判のようなものも含まれています。人間として考えさせられることの多い本だと思います。

この作品だけに限らず、灰谷さんの本は、人間とはどうあるべきか、人間はどう生きていくべきかなど、人間観、人生観のようなものを考えさせてくれるものが多いです。近所に住んでいても、名前すら知らないとか、思いやりとかいたわりの心を持った人が少なくなったと言われる、今の利己主義の世の中に、課題を投げかけてくれます。

この本は、人の失いつつある、人間らしい心をきと呼びましてくると思います。

(たてやま とよか：児童教育学科)

909

3

48

☆ ニュース・お知らせ ☆

〈図書館委員会〉

59.7.6 ①59年度図書館予算と各部門の資料費について

②オンライン文献情報検索サービスの実施について

59.10.5 ①新規購入学術雑誌について

〈研修・出張〉

○第2回文献情報センター・シンポジウム

59.6.22 於：京都大学

今永課長出席

○福岡オンライン研修会

59.6.25、26 於：福岡アメリカ領事館

小嶋司書、川上司書補出席

○昭和59年度 文部省委嘱司書講習

59.7.13～9.5 於：八幡大学

大羽司書出席

○昭和59年度私立大学図書館協会総大会・研究会

59.7.19～21 於：創価大学

後藤館長、刀根次長出席

○第3回電算機事務処理利用研修会

59.7.26～28 於：静岡県熱海市

坂口司書出席

○昭和59年度私立大学図書館協会西地区部会

九州地区協議会研究会

当番館：鹿児島経済大学図書館

59.9.21 於：鹿児島市（城山会館）

杉野司書出席

○昭和59年度私大連盟一般研修（図書館関係）

59.10.2～5 於：愛知県幡立町（三ヶ根）

倉光係長出席

○昭和59年度全国図書館大会

59.10.25～27 於：大阪（万国博ホール他）

今永課長出席

〈本学図書館職員杉本善夫氏、福岡県私立学校教育功労者として表彰〉

本学図書館職員杉本善夫氏が、昭和59年度の福岡県私立学校教育功労者として、11月8日奥田八二福岡県知事より表彰されることになりました。これは毎年度、県の私学教育に特に功績のあった者が表彰されるもので、氏の35年間にわたる図書館一筋の職場の土台を支える地味な功績が認められたもので、

本学の誇りとともに、図書館で働く我々の励みでもあります。氏の今後のご健康と、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

〈館内研修〉

○第1回（59.4.4）

刀根次長「図書館界の動向と図書館関連機関の現状」

○第2回（59.5.2）

今永課長「DIALOG オンライン文献情報検索サービスの実施について」

○第3回（59.6.6）

杉野司書「ジャパン・マークを利用しての和図書館目録カードの出力」(プロジェクトチームの他館実情調査報告)

○第4回（59.7.4）

品川司書「洋書目録作成基準の作成について」

告知板

○大学祭期間中の開館

大学祭期間中も平常通り9時から21時まで開館しますが、この間1階学習室は閉室します。

○冬期休暇中の開館時間および休館日

12月25日(火) クリスマス休館

26日(水) 9:00～21:00

27日(木) 9:00～12:00

28日(金) } 年末年始休館

1月5日(土) }

7日(月) 9:00～21:00

※この間1階学習室は閉室

1月8日より平常通り開館

○冬期休暇長期貸出（下記対象以外は除く）

学部学生、専攻科生

12月15日(土)～1月7日(月) 5冊以内
留学生別科学生

12月15日(土)～1月7日(月) 10冊以内
大学院生

10月26日(金)～11月17日(土) 20冊以内
いずれも返却期限は1月17日(土)です。

○卒業年次生へ

卒論用に別途3冊（1ヵ月）貸出中
先輩の卒論、閲覧実施中
（詳細は受付まで）